

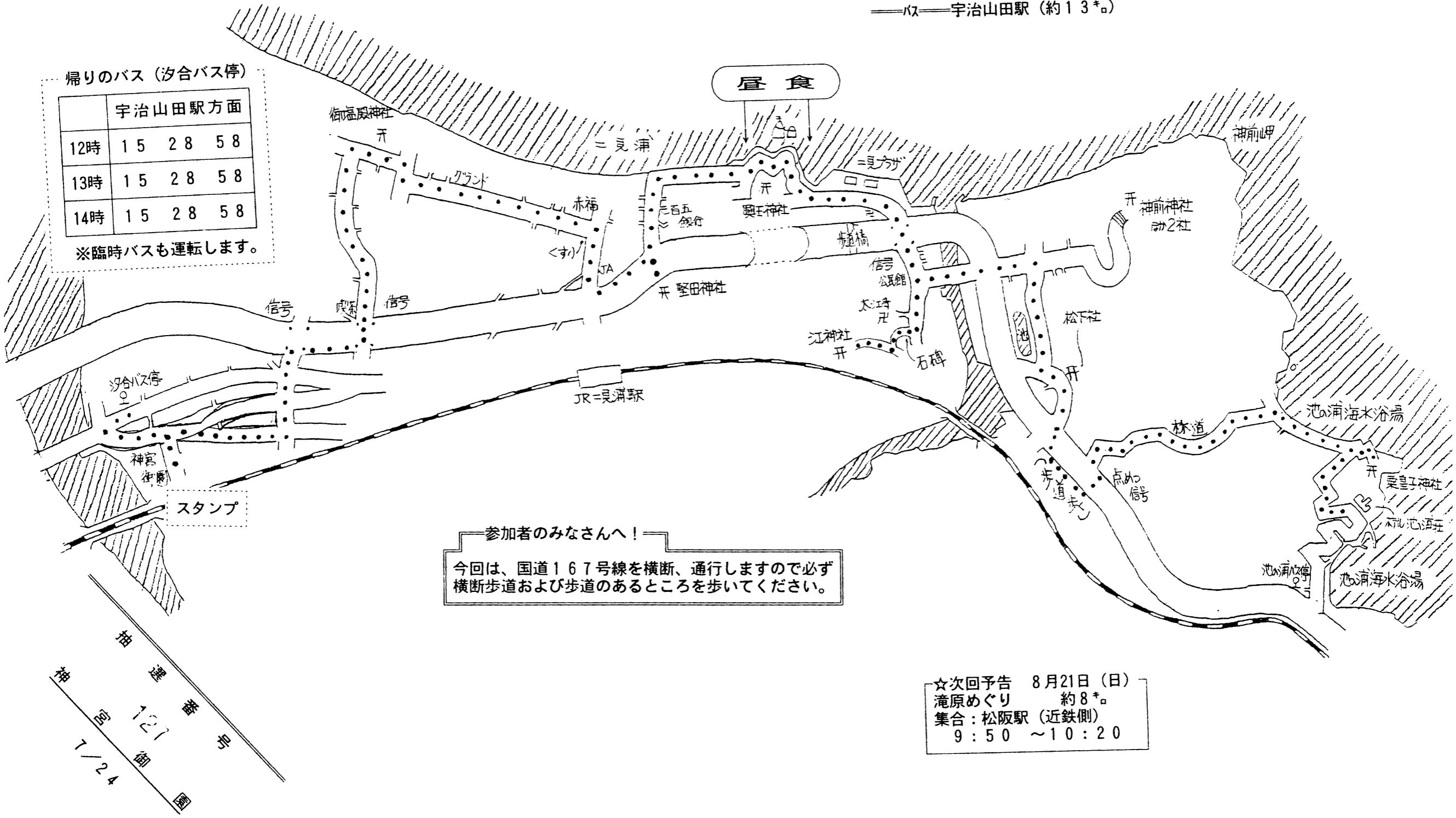
平成6年 お伊勢さん125社めぐり
7月 二見めぐり 参拝7社

鳥羽駅—バス—池の浦荘前バス停 粟皇子神社 松下社
二見興玉神社 御塩殿神社 神宮御園 (スタンプ) 汐合バス停
—バス—宇治山田駅 (約13km)

帰りのバス (汐合バス停)

	宇治山田駅方面		
12時	15	28	58
13時	15	28	58
14時	15	28	58

※臨時バスも運転します。



参加者のみなさんへ！
今回は、国道167号線を横断、通行しますので必ず横断歩道および歩道のあるところを歩いてください。

☆次回予告 8月21日 (日)
滝原めぐり 約8km
集合：松阪駅 (近鉄側)
9:50 ~ 10:20

神宮御園
121
7/24

二見めぐり

◎粟皇子神社

皇大神宮摂社。度会郡二見町大字松下、現在小字鳥取の海辺に鎮座。

祭神 淡海子神（あはみこのかみ）。皇大神宮儀式帳には、須佐乃乎命御玉道主命（すさのをのみことのみたまちぬしのみこと）を祀るとある。

垂仁天皇の御宇～倭姫命の皇大神を奉載して御遷幸の時、淡海子神が御贄を奉った功により、この社を定めたと伝えられている。伊気浦（いけのうら）の海岸鎮護の神を御祭りしたもの。

元々この神社は松下になかった神社である。当初池ノ浦の中にある中之島にあったといわれている。元禄5年（1692）に、この中之島では神社は建てられないということで、中之島が間近に見える鳥取の浜辺へ社地六間四方を定めて再興した。（この地は鳥取古墳群の真中付近海岸よりと推定されている。）

これ以後の記録は松下に文書が残されており、正徳2年（1712）に宮地が波打際まで八間ぐらいで高潮の被害を受けたので、現在の宮地に移転したものである。

（資料、二見町史、神宮摂末社巡拝・猿田彦神社）

◎松下社（蘇民の森）

祭神 素盞鳴命・南部谷神社の祭神（1909・明治42年合祀、不詳一座）
天神様の祭神・菅原道真の三柱が祭られている。

二見町松下の氏神。加木牛頭天王社・御船社・蘇民の森・清明の社とも呼ばれている。非常に古い社であるが、古書記録はない。

※蘇民将来の由来と物語

「素盞鳴命（すさのをのみこと・天照大神の弟神）が武塔神と名のり南海の女のもとにいかれる途中、ある部落で日が暮れ宿を求めべく金持ちの巨且将来の家に赴き一夜の宿を乞いしが断われしため貧乏の蘇民将来の家に宿を乞い

しところ快く迎えられたのである。この主人は慈悲心があり招し入れると粟がらの座を造ったり又粟飯を出すなり心温まる接待をした。翌日尊は厚く礼を申され旅立たれた。

尊はこの報恩にと年月を経て尋ねられ蘇民に汝の子孫は何人ぞと問われ妻と子の3人わび生活なることを告げしところ、尊は蘇民に茅（ち）の輪3巻を作り、腰に下げ又家門には蘇民将来子孫と符に書き吊り下げよう教えられた。

その夜、巨且（兄）の住む部落は大洪水に遭い巨且の一家は家もろとも流され全滅し蘇民（弟）一家は不思議と難を免れ、次いで尊は汝の子孫には今後かならず指示とおりに実行せば恐ろしき疫病が流行せんも決して罹らせまじと誓はれたという。

二見の松下社で茅（ち）輪のお守りと蘇民将来の符を授与している。」

蘇民将来の桃符は江戸時代慶安年間に盛んであったが、近年廃れ、昭和50年（1975）から復活。現在は12月16日に神社で作成したものを神前に供え、祈祷の後符初の式を行い、この日から一般に分ける。

なお、入口の「大楠」は、県指定天然記念物である。

（資料、二見町史ほか）

○神前（こうざき）神社

皇大神宮摂社。

度会郡二見町大字松下、松下社の北方小字許母利の山上に鎮座。

祭神 国生（くわり）神の子・荒前比売命（あさきひめのみこと）を祀る。

垂仁天皇の御宇～倭姫命の皇大神を奉載してこの地に御遷幸の時、荒前比売命（あさきひめのみこと）を鎮祭という。

神前神社は、松下神社の手前を左に折れて、山添いに海岸近く出て、谷間を東に上る。小井戸口山の頂上、数百段の石段を上る。海際にそそり立つ百米近い小山の頂きに鎮座。眼下は一面の伊勢湾である。

この社は元小字小井戸口の海岸崖頭にあったが、風潮で危険なところの

のところに移転した。一説に松下神社はこの神前神社の遺跡ではないかという説もある。撰社再興記に「寛文3年（1663）10月11日神前社を立つ是は松下村より10町程北大海の端大山の根に立て申す20～30間四方形有但カリヤの森と云う」とあるが、この地は贅海（にえうみ）の神事の行われた地のそばの山腹で、神事が行われていた時には仮屋が二字建てられていた事実もあり、カリヤの森はその混同とも考えられる。

伊勢湾に望む荒岬に鎮座する神、往古は、この海岸を通る航海者が航行の安全をこの神にかけて祈った。元は、山の上ではなく、松下の東北の海岸にあったといわれている。浸水によって、社地を失い、享和年中にここに移した。

（資料、二見町史、神宮撰末社巡拝・猿田彦神社）

○許母利（こもり）神社

皇大神宮末社

度会郡二見町大字松下、神前神社に御同座

祭神 粟島神御魂（あはしまのかみのみたま）

元々この神社は社地がなく現在も神前神社に同座している。ともに松下の海岸鎮守の神である。

ここより見下ろす松下の海岸近くには、祓島の岩礁がある。御饌島（めじま）と呼ばれ、明治4年（1871）神宮改革以前は、ここで皇大神宮の贅海の神事が行なわれたところである。贅海神事（にえうみしんじ）とはここで荒布苔（あらめ）、若布苔（かめ）を執って内宮の御饌料とするものである。

（資料、二見町史、神宮撰末社巡拝・猿田彦神社）

○荒前（あらさき）神社

皇大神宮末社

度会郡二見町大字松下、神前神社に御同座（資料、二見町史）

◎江神社

皇大神宮摂社

度会郡二見町大字江

祭神 天須婆留女命（あめのすばるめのみこと）の子・長口女命（ながちめのみこと）

大歳御祖命（おおとしのみおやのみこと）、宇加乃御玉命（うかのみたまのみこと）

の三座（皇大神宮儀式帳による）

また、「倭姫命世記」から佐見都日子命の一柱とする説もある。

現在の江神社境内地は、寛文3年（1663）断絶していたこの神社を再興したときに、旧地がわからずこの地が選ばれたものである。

（資料、二見町史）

○大江寺（だいこうじ）

本尊・木造千手観世音菩薩坐像（重要文化財）鎌倉時代

寺伝では「創立年月、開基僧名不詳。あるいは天平年中、僧行基開基なり」とある古寺である。

京都の文人、坂十仏が訪れた時は（1342・康永元年）衰退していた様子が語られている。寺は長い年月の間栄枯盛衰があった。

貞享3年（1686）6月25日に落雷のため全焼する。幸いにも千手観音像は運びだされる。

元禄5年（1694）現在地の観音堂中央の護摩壇再建、この頃、本堂も再建されたものと考えられる。

享保13年（1728）仁王門完成

○猿田彦石

二見町江村会所前にある大岩。河口が大きく広がり、村が南の谷にあったころ、興玉（沖魂）神がこの大岩に寄りついたと言い伝えられている。大江寺の鎮守興玉神に関連がある。いつしか猿田彦の名で呼ばれるようになった。（資料、二見町史）

○二見興玉神社

現在地に創設されたのは、明治30年（1897）6月18日である。

江村・大江寺の鎮守神、興玉社を神遷したものである。

始めは二見の茶屋が氏神とした三宮（しゃく）神社の境内社であったが、明治43年（1910）3月末日をもって両社を合併、無格社・二見興玉神社と改称した。

明治の中頃まで、この辺りは、海中の興玉神石及び日の出の遥拝所として、正面に大三方（だいさんぼう）をおき、これで賽銭を受けるとともに、小注連縄や蛙を置いた。側に板葺小屋があり、小注連縄と蛙を授与し、立石と日の出の図に二見興玉神と書かれた神符や立石の風景画を頒布した。（資料、二見町史）

○夫婦岩（立石）

立石崎にある海食によって生じた離れ岩である。大岩と小岩があり、神聖視されている。大岩は緑色片岩、小岩は石英片岩から成る。

正式には、大岩は立石、小岩は根尻岩という。

立石を現在のように「夫婦岩」と呼出したのは明治以降になってからである。

両岩の大注連縄は、これを作っている江村では、興玉明神の「結界の縄」と称していた。興玉明神は海中の興玉神石のことである。結界とは聖と俗を隔てるものである。

夫婦岩に大注連縄が張られ初めについては、不明である。永仁3年（1295）のころの「伊勢新名所絵歌合」の中の「打越の浜」に夫婦岩らしき岩が描かれているが、注連縄は見えない。注連縄は、鎌倉から室町時代のいずれかに掛けられるようになったとする説がある。立石の大注連縄の直下を垢離場（ごりば）とし、その西寄りを代垢離場としたことが江戸時代の文書に見えるところから、大注連縄は、この垢離とのかかわりが深いものと思われる。垢離とは、神仏に参拝するとき、水を浴びて心身のけがれを

とることをいう。

(資料、二見町史)

○興玉神石

この興玉神石は、「二見名勝誌」に「立石を東北にへだたる六町の海中にあり。その形、東西二町、南北一町、周囲十町余ある一大平岩にして、上に三つの岩柱の如きもの直立し、潮干の時には岩頭を露出することありしが、安政元年の海嘯(かいしゅう)以後、まったく隠れて見えなくなりし」という。

結界とは聖と俗を隔てるもので、海中に没した岩が、常世神が太平洋の彼方から寄りつく聖なる神石であり、興玉は沖の魂(たま・神)のことである。

(資料、二見町史)

○二見浦・二見海水浴場

二見浦の美しさは、万葉の昔から人々に賞賛されてきた。この二見という名は、「倭姫命世記」によると「倭姫命がこの地を通られた時、折からの雨に煙る浦の景色を何度も御覧になり、ここは何という国かと問われ、従者の一人が、これが速雨で名高い二見の国ですと答えた。」という伝説からきている。

二見の美しさについては、藤原定家も「ますかがみ二見の浦にみがかれて神風清き夏の夜の月」と歌っている。

この浜辺は、海水浴場としても有名で、全国第一号の海水浴場として明治15年10月19日に二見浦海水浴場開きが挙行された。

また、二見は平安後期から鎌倉前期にかけての僧侶歌人・西行ゆかりの地で、西行はその晩年の治承4年(1180)ごろから文治2年(1186)まで二見の安養山に庵を結んだという。

その時の歌の一つ

「伊勢にまかりたるけりに、三津と申す所にて、海辺暮と云う事を神主どもよみけるに」

『過ぐる春しほのみつより船出して波の花をやさきに立つらん』

(資料、二見町史)

○音無山 (119・8m)

この山は、江村にあることから一名江山ともいわれている。山の上から見る景色は美しく、西行も『松やあらぬ風や昔の風ならぬいつれの秋か音無の山』と歌っている。

(資料、二見町史)

◎堅田神社

皇大神宮摂社

度会郡二見町大字江字堅田、音無山の西の麓に鎮座。

祭神 佐見都日女命 (さみつひめのみこと)

延暦23年(804)の皇大神宮儀式帳にみられる古社。

堅田というのは瀧田(ただ)ということで海岸の入江になっている所の田を指していったもので、そこを開拓し支配する国神(くにづかみ)なる佐見都日女命(さみつひめのみこと)を奉祀した神社である。垂仁天皇の御世、倭姫命がこの地に来たとき、堅塩を奉りし縁故で、この神社を定められたといわれている。その時、大若子命は御塩浜と御塩山を定めたとある。

このことは、この神社が神宮の製塩と深く関わってきたいわれであり、祭神の佐見都日女の神名は佐見山や鮫川と関係がある。

鎌倉時代、正応4年(1291)女西行といわれた歌人・後深草院二条は、伊勢・二見を訪れた時、「佐美の明神と申すやしろはなぎさにおわします。それより舟にのりて、答志の島、御饌の島、通るしま(潜り島)など見に行く」とこの神社のことにふれている。

(資料、二見町史、神宮摂末社巡拝・猿田彦神社)

◎御塩殿神社

皇大神宮所管社

度会郡二見町大字荘

社域内には、「御塩汲入所・御塩焼所・御塩殿」がある。

面積25,519m²

御塩浜は、度会郡二見町大字西字浜田 面積2,000 m²

神宮ご料の御塩は、五十鈴川尻の御塩浜で毎年土用に塩水をとって、御塩殿神社域内の御塩汲入所に運ぶ。その塩水をすぐ東にある御塩焼所にて、鉄の平釜で焚きあげて荒塩とし、これを御塩殿で三角形の土器につめて焼き固める。これを堅塩という。神宮から神職が出向し、身を清めて焼き固めを奉仕する。

皇大神宮所管社・御塩殿神社は、その守護神である。毎年10月5日に御塩殿祭が行なわれる。祭神は一説に塩土翁（しおぢのおじ）といわれている。

御塩殿の記録は古く、延暦の皇大神宮儀式帳に見える。その当時から御塩殿・御塩焼殿・御塩焼所が存在していたことがわかる。

神社の入口に、鴨長明の

「二見瀉神さびたてる御塩殿幾千代みちぬ松陰にして」

の碑が建立されている。

（資料、お伊勢まいり・神宮司庁、二見町史）

◎神宮御園

度会郡二見町大字溝口 面積19,969m²

明治31年（1898）に開設。

神宮の諸祭典にお供えする野菜、果物を清浄に栽培している。

大根・人参・ごぼう・さといも・白菜・かぶら・ほうれんそう・きゅうり・かぼちゃ・なす・柿・梨・蜜柑・びわ・ぶどう・桃・栗・メロン・イチゴなど。

（資料、お伊勢まいり・神宮司庁、二見町史）